

ヘルプマークでつながる社会

明石市立大久保北中学校 2年 新田 歌菜

あっ、あの人もヘルプマークをつけている。急いでバス停に向かう人のリュックに、私と同じヘルプマークが揺れていました。私はその時、困難を抱えているのは自分だけじゃないんだ、と思う気持ちと、どんな不安や困り事があるのか、どんな援助や配慮が必要なのかをずっと考えていました。

私には心臓の病気があり、電車やバスに乗っているときに、重い荷物も持たず、立ってられなくて調子が悪くなることがありました。それにペースメーカーも入れているので電磁干渉を受けると不整脈やめまいが起きる事があり、満員電車では携帯電話やカバンなどの磁石が付いているものなどが怖くて仕方ありません。

その他にも店舗や図書館など公共施設の出入り口などに設置されている電子商品監視機器や急速充電器など、どこに行っても気をつけなければいけないことがたくさんあり疲れてしまいます。いつ何が起こるかわからない不安もあり外出したくなくなることもありました。

「思いやり駐車場」と呼ばれる車椅子のマークのある駐車場に停めた時のことです。あの子歩けるのに、なんであそこに停めてるんだろう。そんな声が聞こえてきたり、ジロジロ見られたりすることがありました。

思いやり駐車場の車椅子のマークは、世界共通のシンボルマークで、障害者が利用できる建築物・施設であることを明確に示す意味があるのですが、マーク自体が車椅子の形をしていることもあり、車椅子の人のための場所と誤解されていることが多いようです。

今はほとんどの車はスマートキーシステムが搭載されていて、アンテナ部からも定期的に電波が発信されているため、ペースメーカーを入れている人は、車の近くを歩くのにも二十二センチの間隔が必要です。そのため、間隔が広く取ってある「思いやり駐車場」に停めることもあるのですが、それを知っている人は少ないと思います。

車椅子を使用する時にも、高齢者や、肢体が不自由な方が使うものという風潮があり、自分で移動できたり立てるとなると不思議に思われることもあります。心臓病だけに限らず他の病気でも酸素飽和度が低いときには、立ち上がったたり歩くと酸素が下がってしまいます。心臓や肺にも負担がかかるため、車椅子を使用しなくてはなりません。

そういった私自身の経験から、一見元気そうでも外見からでは分かりにくい障害を持った人がいることや、そんな時どうすれば伝えられて、知ってもらえるのだろうと、ずっと思っていました。

丁度、その頃、内部障害や難病の方、義足や人工関節を使用している方、妊娠初期の方など、配慮や助けを必要としている人が身につけ、周囲に知らせることができる、ヘルプマークが出来たと知りました。

電車やバスなどの交通機関や公共施設でポスターが掲示されていたり、身につけている人を見かけるようになり、私も外出時にはつけるようになりました。もしもの事があった時に手を貸してくれる人がいるという安心感がある一方で、交通機関では大抵の人は携帯電話を見ていて、つけていても気づいてもらえたことはありませんでした。私自身もしんどくても、席を譲っていただけませんか、となかなか自分から声を上げることができません。それは自分が病気だと言うのが嫌なわけでも、声をかける勇気がなく恥ずかしいからでもなく、やはり迷惑をかけているようで何だか申し訳ないと思う気持ちでいっぱいになるからです。

せっかくできたヘルプマーク。調べてみると十年程経った今でもその認知度は約六割でした。認知不足により、役に立たなかったり周囲の反応が気になるから利用していない人も多いと分かりました。また、つけている人を見た時、私が思ったようにどんな助けがいるのか、今困っているのかが分かりにくいからなのかもしれません。

私はヘルプマークを身につける時、どんな事に困り、助けがいるのか、緊急時の対応の仕方などを簡単に示す必要があると思いました。私も助けてもらうばかりではなく、いつも誰かの力になりたいと思っているので、ヘルプマークをつけている人の見えない不安や知られていない困難について、もっと知る事で、今助けがいるのか、何に困っているのかを想像して声をかけることができるのではないかと思います。誤解や偏見をなくすにはまずお互いのことをよく知る、ということが大切だと思います。誰もがヘルプをだせたりそれを助けてくれる人がいる。そんなお互いの些細な悩みを話しあえるあたたかな未来を私はこのマークと共に感じています。